現在では当然と言うか標準的に行われている出張採録方式も、当初は随分非難を浴びたことを忘れることは出来ない。班会議の席上でも「宮城県は経済的な理由からか」、「病院を、医師を信用できないから」採録をするのかと指摘を受けることがあった。先生は実際に臨床の医師としての経験から、また、がん登録が大学で実施されていた頃採録に出掛けた病院の実情からも、がんを登録する意義と趣旨には賛成して貰えてもそれを医師に依頼することの難しさを感じたことから、病院、医師の要請に応じ、代わって採録をするという方式を取ったのである。これが功を奏し、がん登録のための採録が病院側の診療録、診療録管理を図る尺度の一つとして受け入れられるようになった。主旨を知った病院側では正確な数字に反映できるようにと診療録の記載や提出にも協力してくれるようになったのである。当時のがん登録室の職員は先生を含め非常勤職員3名から4名だけであったが、対象とする殆どすべての病院の関係者がその不足を補って余りあったというのが実情である。

こうした経過が年々登録精度の向上に現れてくると、データを利用したいという研究者の要求にも応えることが出来るようになった。しかし、全体としての数字はある程度信頼できても、ごく限られた地域の、部位の詳細なデータの精度には未だ満足できなかった先生はデータの利用の可否にはかなり厳しかった。一方、採録、報告病院のデータは必要に応じ随時当該病院に還元されていたことは言うまでもない。精度が充分でないデータの分析は手法がどうあれ、間違った見解を与えることになることを危惧したのである。これをある医師は彼を芸術家と評し、また、データの出し惜しみをしているとも思われていた。

先生はご存知の通り、感情に起伏のない非常に穏やかな性格で終始変わることは無かった。また、外見と同じくすべての分野に非常に幅広い見方と考え方を持っていた。それを私は、「インスタントラーメンからレアのステーキ」に至るまでそれなりに味わうことの出来る人と評していた。これは対人関係にも言えることで、性、年齢、老若、職業を問わず、どんな立場の人にも柔軟に対応していたように思う。これが先生の性格であったのか、また非常に優れた指導者としての資質であったのかは分からないが、同志としては心安くもあり、理解に苦しむことも多かったように思う。なぜなら、これを仕事に適用してみると、先生の目標を理解していても、結果がどの辺まで到達しているのかを自分で判断せざるを得なかったからである。こちら側の能力の限界で充分に応えることは出来なかったが、常に上を目指すことを言葉にせずに気付かせてくれたということに偉大さを感じている。

昨年11月14日未明に最期のときを迎えたという知らせを受けても、信じたくないという気持ちからか実感として受け入れることが出来なかった。あれから2ヶ月、あの大きな存在を失ってしまったことを認めざるを得ない。先生の穏やかな笑顔、がん登録について語るときの厳しい表情、いろいろな光景と思いが錯綜する。

しかし、今となっては仕事もほどほどのところで諦め、先に逝った仲間たちの前で「千の風になって」をパパロッティ並みの声量で朗々と歌いあげているような気がしてならない。

① 栗原 登 先生
② 筆者
③ 故・高野 昭 先生
④ 故・平山 雄 先生

アジア太平洋国際会議（仙台）にて

第 29 回国際がん登録学会年次総会（29th Annual Meeting of IACR）に参加して

西野　善一
宮城県立がんセンター研究所　疫学部

第29回国際がん登録学会（IACR）年次総会は2007年9月17日から20日までの日程でヨーロッパ・スロベニアの首都リュブリャナで開催されました。スロベニアは旧ユーゴスラビアから1991年に独立し、西を

イタリア、北をオーストリアに接する人口約200万の国です。地域がん登録の歴史は古く全国を対象とする登録が1949年に開始され、世界各国のがん罹患統計がまとめられた5大陸のがん罹患（Cancer Incidence in Five Continents）にも第1巻の1956-1960年のデータより継続して掲載されています。日本はこの時期場所によっては大変な暑さだったようですが、スロベニアは既に晩秋の気配が感じられました。リュブリャナは、古城の下を流れるリュブリャニツァ川に架かる三本橋を中心として落ち着いた町並みが広がるこぢんまりとして魅力的な都市でした。総会は例年趣向をこらした毎晩の親睦プログラムが楽しみですが、今年は18日夜の“Slovenian evening”で地元のダンスが披露されるとともに参加者もダンスの輪に加わり大いに盛り上がりました。

Slovenian evening にて

今回の総会のテーマは、“At the crossroad of tradition and new technologies in cancer registration”および“The role of cancer registries in cancer control”でした。口演は計46題で、電子データのがん登録への利用が10題、がんの成因と関連する研究が7題、がん登録の方法論が5題、がん検診の評価が10題、生存率評価が8題、治療評価が4題、がん対策が2題という内容でした。

他に各トピックで招待演者によるレクチャーがあり、この中ではDr. Penberthyによる“Automating cancer registration-challenges and opportunities”の講演の前半で、登録データで化学療法実施把握の感度が56-72%にとどまるといったデータの完全性の問題など現在の地域がん登録が抱える課題が概説され参考となりました。また口演の中では、マンモグラフィ精度管理向上を目的としたパイロットプロジェクトにより、介入地域で対照地域と比較し早期のステージの乳がん割合の増加や腫瘍径の大きいがんの罹患率が減少するといった改善が認められたことからプロジェクトの対象を州全体に拡大したというドイツの発表、および世界各地の40を越える地域がん登録のデータを使って、乳がんの放射線治療による心疾患死亡への影響を心臓への放射線量が多い左側のリスクを右側と比較することにより検討した予備的な解析結果の報告が地域がん登録の予防や治療の評価への活用として個人的には印象に残りました。

日本から比較的アクセスがよいヨーロッパでの開催ということもあり、例年に比べて日本より多くの方の参加がありました。口演では、愛知県がんセンターの田島和雄先生が国際対がん連合（UICC）のアジア地域におけるがん対策について紹介されました。ポスター発表は全体で135題でしたが、日本からは国別では最多となる19題の参加がありました。持ち運びに便利な布で印刷されたポスターが多く見られ、良くも悪くも目立ったポスターをスライドを使った軽妙な解説で紹介し表彰を行なう最終日恒例のポスターアワードでも「テーブルクロスにも風呂敷にも使えて便利」と賞賛？されましたが、日本からのポスター賞は国立がんセンターの味木和喜子先生の「発表者名最多」賞のみにとどまりました。次回以降（私を含めた）日本の参加者の奮起を期待したいところです。

本総会での日本にとっての重要なニュースは、開催中に行われたIACR理事会で2010年のIACR総会が日本で開催されることが決まり発表されたことです。特に登録精度の面の見劣りを他国からも指摘され問題を抱える日本の地域がん登録ですが、2010年の開催は日本の地域がん登録を飛躍させる重要な契機になることが期待されます。地域がん登録関係者を中心とし、がん研究やがん対策にかかわる各方面の協力も得て開催の成功につながればと思います。

次回、2008年の年次総会は11月18日から20日の日程でオーストラリアのシドニーにて開催の予定です。日本におけるがんの罹患や転帰の状況を紹介でき

るだけではなく、世界で地域がん登録のデータががん研究やがん対策にどのように活用されているかを知る貴重な機会ともなりますので多くの方の参加を期待しています。

第 16 回地域がん登録全国協議会総会研究会ならびに実務者研修会を終えて

児玉　和紀
財団法人放射線影響研究所

平成 19 年 9 月 6 日（木）から 7 日（金）にかけて、広島市南区民文化センターで第 16 回地域がん登録全国協議会総会研究会ならびに実務者研修会を開催し、おかげさまで無事終了しましたことをご報告申し上げます。

平成 19 年（2007 年）は昭和 32 年（1957 年）に広島市医師会腫瘍統計事業が開始されてから、ちょうど 50 周年に当たる年であり、記念すべき年に総会研究会を開催することができましたことを誠に名誉なことと考えています。広島市医師会も、本総会研究会に合わせて広島市医師会腫瘍統計事業 50 周年誌を作成され、参加者全員に配布いただきました。また、広島市医師会の長年の功績に対して、総会研究会の中で広島市から感謝状が贈呈されました。

総会研究会は「保健・医療と疫学研究における地域がん登録の役割」をテーマとし、大きくシンポジウム、会長講演、市民公開講座で構成しました。「地域がん登録の課題と今後の展望」をテーマとしたシンポジウムでは、祖父江友孝国立がんセンターがん対策情報センターがん情報・統計部長とともに座長をお務めいただいた迫井正深広島県福祉保健部長に「がん対策における地域がん登録」というタイトルで基調講演をいただき、その後、味木和喜子先生（国立がんセンター）から「地域がん登録の標準化の現状と課題」について、有田健一先生（広島県地域がん登録運営部会・広島県医師会）から「地域がん登録に果たす医師会の役割」について、田中英夫先生（大阪府立成人病センター、現・愛知県がんセンター）から「地域がん登録の法的現状と課題」について、井岡亜希子先生（大阪府立成人病センター）から「がん対策推進計画策定における府県がん登録の役割」について、それぞれご講演をいただきました。シンポジウムの最後には総合討論を行い、まさにテーマに即した内容について活発なご議論をいただきました。

会長講演では、次回の会長を務められる関根一郎長崎大学大学院医歯薬学総合研究科原研病理教授に座長の労をお取りいただき、「放射線影響研究における地域がん登録の貢献」をテーマに、地域がん登録なしには成し遂げられなかった放射線影響研究所の研究について、結果の概要をご紹介させていただきました。

昨年の山形に引き続いて開催した市民公開講座は、「50 周年を迎えた広島のがん登録―広島の保健・医療に不可欠ながん登録について考える―」をテーマに行いました。座長を岡本直幸地域がん登録全国協議会理事長（神奈川県立がんセンター）と鎌田七男広島県地域がん登録運営部会長（原爆被爆者援護事業団）にお願いし、西信雄先生（放射線影響研究所広島研究所疫学部）から「広島におけるがん登録の取り組みと成果」について、桑原正雄先生（広島市医師会腫瘍統計委員会・広島市医師会）から「広島市医師会とがん登録－その 50 年の歩みと保健・医療への貢献」について、安井弥先生（広島県腫瘍登録実務委員会・広島大学大学院医歯薬学総合研究科分子病理学）から「がん登録資料はどのように活用されるのか－広島県でがんはふえているか？」というタイトルで、片山博昭先生（放射線影響研究所情報技術部）から「がん登録では個人情報はこのように守られている」というタイトルで、それぞれご講演いただきました。またこの 4 人の演者の後に、中国新聞社の山内雅弥論説委員から、市民の立場からの追加発言をいただきました。最後に総合討論の時間が設けられましたが、がん患者である市民からは地域がん登録は身近なものではなく、さらに地域がん登録そのものの啓発活動や、市民への成果の還元が必要であることを痛感させられました。

9 月 6 日（木）に開催された実務者研修会は、柴田亜希子先生（山形県立がん・生活習慣病センター）、丸亀知美先生（国立がんセンター）、松尾恵太郎先生